目白大学新聞

第四九号
二〇二三年（令和五年）九月三〇日
一九九四年五月十八日創刊

Mejiro University News Paper
No.49
September 30, 2023

編集
目白大学メディア学部
〒一六一―八五三九
新宿区中落合四―三―一
TEL
〇三―五九九六―三―三〇

妙正寺川に展示された反物「川のギャラリー」（編集部員がフィルムカメラで撮影）

「染の小道」開催への思い

西武新宿線で高田馬場から2駅の中井・落合の地で、2月24日～26日の3日間、3年ぶりに大規模開催で行われた「染の小道」は江戸時代から伝わる染物の文化を通して中井の街を活性化するプロジェクトだ。今回、目白大学新聞編集部の学生10名がボランティアとして参加し、実行委員である東健太郎（あずま）さんに取材を行った。

――染の小道とはどのようなイベントなのでしょうか。

染の小道は、新宿の地場産業である染色をテーマに道のギャラリーと川のギャラリーが中心となる街おこしのイベントです。染色を街の観光資源として発信し、地場産業にとどまらない魅力を知ってもらいたいという思いで始まり、イベントとして大きくなりました。

――染の小道を開催しようとなった理由は何ですか。

少し先程の話と重なりますが、元々、中井の街の魅力が伝わりにくく、住んでいる人にしか分からない良さがあるのですが、誰にでも知ってもらえる発信がしたかったからです。特に世界に向けて、染色の文化を利用すれば、街を発信できるのではないかと思い、始まりました。

――3年ぶりに大規模開催ができて、どのようなお気持ちですか。

まず、本当に疲れましたね（笑）元々、道のギャラリー自体は例年通りの開催でした。川のギャラリーに関しては、コロナの感染防止対策として縮小していましたが、我々側にも事情がありました。毎年、飾っている染物が風などにやられ、飾れるようなものがなくなってきたためでした。昨年度は、その修復作業を学生や地域の人々たちにも手伝っていただきました。11月から始め、月1回の修復作業を4回、1日かけて修復し、大規模開催を再開でき、陰ながらお手伝いいただいた多くの人への感謝の気持ちでいっぱいです。

――プロの職人さんだけではなく、東京造形大学や地域の小中学生の子どもたちも染物を展示する通りがあるのですが、そこにはどういう意図がありますか。

芸術を学んでいる学生の発表の場を作りたかったのです。今回は、他にも文化学園大学や早稲田ビジネスカレッジさんにも関わっていただきました。染物だけではなく、イベントで活躍する学生たちの姿が街全体のにぎわいに繋がっていると思います。

――今回、地域を活性化したいという思いや地域への愛情が伝わった。地域に恩返しをする気持ちは多くの人に笑顔を届けていたに違いない。

（編集部3年　櫻井雄晟）

インタビューに答える東健太郎さん

伝統を受け継ぐおかめ工房

今年の2月下旬に「染の小道2023」が開催され、中井の街にはたくさんの染め物が飾られた。そんな中井には「おかめ工房」という実際に染め物を行っている工房があることをご存じだろうか。ここでは、誰でも染め物を体験できる。今回は、おかめ工房の山本加代子さんに取材を行った。

――染め物はどのように作られるのでしょうか。

私たちの工房は「紅型（びんがた）」なんです。紅型は沖縄の伝統工芸のことを言います。それを東京風に新しいデザインを作ったり、オシャレな色を使って染めるので、沖縄の紅型とはちょっと違う「モダン紅型」という名前を付けました。やり方は、まず型紙を使います。これにのりをおいて白くなったところを染めていきます。使っている染料は顔料で、これは土や石、草木などが材料になっています。化学染料ではないので水や油に溶けません。そして、呉汁（大豆を使った豆乳みたいな汁）を使って染料を溶かし、1度で色は作らず、3回に分けて染めていきます。最初は薄く色を染め、2度目は発色をよくするために違う色を入れて、最後に紅型の特徴である、くまというものを使います。それがアクセントになるんです。これが工程になります。

――伝統を受け継いでいくにはどうすればいいと思いますか。

この染め方は時間がかかってしまうため、高価になってしまうんです。それに今は着物や帯の時代ではありません。なので、インテリアにしたりバッグにしたり、Tシャツやアロハシャツに染めたりもしています。しかし、今後は違うものができたらいいなと考えています。洋服というのも一つですが、何せ時間がかかってしまうというのが大きな問題なんです。なので、今後は小物とかインテリアとかを染めてみたいです。あとは、皆さんが染め物をどうやってやるのか体験しに来てほしいですね。ぜひ、体験しに来てください！

――素人考えになってしまうのですが、ジーパンを染めてみるのはどうでしょうか。

ブルージーンズだと色が乗らないというわけではないので、お試し感覚で出来なくはないです。ワンポイントで入れたら可愛いかもしれないですね。

（編集部3年　青田夏希）

紅型について語る山本加代子さん

人に着付けができるということ

「染の小道2023」で私たち学生ボランティアの着付けを担当したGalleryさくらは和装着付け、着物レッスン、レンタルその他様々なサービスを行っており、「大切な人と」「大好きな場所で」「特別な時間を」「思い出に残る装いで」をキャッチフレーズに活動している。インタビューした方は、人生の中で着付けに約20年程関わっており、着付けの魅力や意外な心情を聞くことができた。

――着付けにはいつから携わっていますか、またきっかけなどありますか。

私自身は20年程着付けに関わっています。元々着物好きだったのですが、人に着物を着せてもらい、友人の結婚式に出席したのをきっかけにまたちゃんと習いたいなと思い、もう1回着付けの学校に行き始めて今に至ります。

――着てもらう人に対する思いはありますか。

今日みなさんに着ていただきましたけど、大体、女性だと着る機会は成人式や夏祭りの浴衣、男性は5歳の七五三のときの記憶しかないみたいな方もいるので、なるべく苦しくないよう、半日着てもう二度と着たくないと思わせないように考えています。私たちは着付けをする時しか関われないので、その後半日着て大丈夫かなとその日一日ドキドキしながら過ごしているんですけど、また着るきっかけになってくれればいいなと思い、いつも着付けをさせていただいてます。

――染の小道では海外の人もいましたが、その人達に日本の着物の文化をどう発信していくか考えたことはありますか。

私はそういうことに関わる機会はなかったので、特に考えてはないです。でも私自身着物が好きで、YouTubeなどで外国のちょっとクラシックなドレスの着方や、インドのサリーの着方などをレクチャーしてくれている動画を発信してくれてる方を見るとやっぱり楽しいので、そういった企画の逆バージョンで日本の人にも海外の人にも着物を着てみたいという魅力が伝わってほしいと思います。まずはこの柄とか何かそういうのからでいいなと思って、ちょっとは和柄を取り入れるなど何かきっかけになれば、いいなって思います。

着付けは、私達が普段生活している中であまり体験することがない。今回お話をしてくれたように、自分達で「着るきっかけ」を作り是非着付けを経験してみてほしい。

（編集部3年　山本真希）

着付け中のメディア学部生

古き良き暖簾の街

3年ぶりとなる「染の小道」大規模開催ということで、イベントも中井・落合周辺もとても盛り上がっていました。妙正寺川には染の小道という名にふさわしい染物がひかれ、イベントに参加した各出店や店舗はその店に合った暖簾を掲げていて、その暖簾を見て回るのも楽しいのではないかと思いました。

初日はあいにくの雨でしたが、最終日は天気にも恵まれ、イベントが最高潮に盛り上がりを見せていました。特に、小道に広がる出店の客引きの声や、イベントに来た地域の人々、さらには海外から日本の雰囲気を味わいたくて参加した旅行者など、様々な人々の輪を見ることができ、新型コロナウイルスで失った繋がりや楽しみを取り戻したようでした。

また、海外から来た方の中には、日本の染物が好きだという方もおり、日本の高い染物技術に感化されたと話していました。

来場者の年代は幅広く、家族連れや夫婦、友達同士や一人での参加も見られ、中井の細道が人で溢れていました。イベント会場ではスムーズに歩くことが困難な道も多数あり、混雑していました。

昼頃には一段と人が増え、良い天気で迎えた最終日を彩る雰囲気は、より一層コロナが終息しつつあることを実感させてくれました。

左の写真は「カブトムシ」というお店の暖簾です。この暖簾はお店の名前であるカブトムシが色鮮やかに描かれており、現代的なデザインが日本の古き良き暖簾と合わさって、伝統的で素敵な暖簾となっています。

このように一つ一つの暖簾にお店の想いや雰囲気が描かれており、染の小道でしか見ることのできない風景の一つとなっていました。

私たちメディア学科のゼミ生もコロナが落ち着いてから初めての地域のイベントだったため、とても楽しくイベントに参加することができました。最終日にはイベントの片付けを通して、イベント関係者の方々とより親密に話しができ、さらにイベントへの思い入れが増しました。来年の染の小道はどのようになっているのか期待したいです。

（編集部3年　太田琴美）

中井の飲食店「カブトムシ」の暖簾

新型コロナウィルスの影響のため約３年半休刊していた「目白大学新聞」がやっと復活します。完全復活ではありませんが、大学新聞の火を灯し続けることは大切でしょう。

今号ではコロナのために開催が制限されてきた「染の小道」を特集しました。大学近郊の中井駅周辺で開催される「染の小道」は、やっと今年から大規模開催ができるようになりました。映像も制作しましたので、あわせて観ていただければ世界が広がるはずです。

映像はここをクリック
または右の QR コードから→

コロナ前の桐和祭 復活に向けて

10月21日、22日に目白大学で最大のイベントとも言える"桐和祭"が開催される。今年度のテーマは「廻祭（かいさい）」で次のような意味が込められている。【廻】自分のため、仲間のためにしたことは回り回って桐和祭に還元される。【祭】ただ、学校行事を楽しむのではなく、祭りの勢いで楽しむ。また、廻祭の「廻」の字に含まれる「えんにょう」には、進み歩くという意味があるため、このテーマには無事開催できるように、という祈願の意味も込められている。

昨年度に3年ぶりに対面で開催された桐和祭、今年はどのようなところに魅力があるのか、そして桐和祭はどのようにして開催されているのか、桐和祭実行委員会の会長である、メディア学部3年生の小西悠喜さんに話を聞いた。

今年の桐和祭のこだわり、注目してほしいポイント

小西委員長によると、「今年の桐和祭の一番の合言葉は『コロナ禍以前の桐和祭の復活』。去年も対面での桐和祭が実現しましたが、制限があった中での開催でした。今年は飲食物や外のステージが復活するなど去年以上にコロナ禍前の桐和祭に戻るので、通常開催の桐和祭の新しい基盤になることを目標としています。

桐和祭実行委員会 会長　小西悠喜さん

どのような企画が開催されるか

企画も盛りだくさんだが、一番の目玉は目白大学創立100周年にちなんで開催される「100周年企画」だという。合計100万円分の商品がくじ引きによって配布されるのである。現在公開されている景品としては「旅行券10万円分」、「Nintendo Switch」、「PlayStation 5」など、とても豪華なものになっている。

加えて、「去年も盛り上がったカラオケ企画が今年も開催されます。飛び入り参加が可能で順位に応じて景品も出るので是非参加して下さい。その他には記念館でのお笑いライブやトークショーに加え、サークルやゼミから多くの出展があります。出典団体の中から部門別に分けて、来場者の投票で1位を決めていく予定です。」

←桐和祭のうちわ

今年の桐和祭は『お祭り』をテーマに据えています。提灯などの装飾はもちろんのこと、メインアリーナでは縁日をイメージして輪投げやヨーヨー掬いなど小さい子が遊べるような場所を作る予定です。さらに10号館の前には、おみくじを引いたりチェキを撮ったりすることができる『目白神社』と称した場所を設けるなど、会場を通してお祭り気分を味わえる作りにする「桐和グランプリ」も開催されるので色々な出典を楽しんでみてください」とのことだ。

桐和祭実行委員の活動内容

「桐和祭実行委員に入ると7つに分かれている部署のうちの一つに加入することになります。その後本部に入り、委員長や副委員長を目指しているような人もいます。本部では委員長と副委員長、プラスそれを手伝う人のような形で構成されており、委員長副委員長は各部署を分担して情報を収集しています。普段は部署ごとに分かれて会議を行なっているのですが、週に一回各部署のリーダーと委員長副委員長で会議を行い、1週間の報告会を行っています。また、桐和祭実行委員では目白大学付近で行なわれるイベント（『染めの小道』など）のボランティアにも参加しており、地域との関わりを深めることで桐和祭に協賛していただいています」

（編集部3年　長島朋哉）

←桐和祭マスコットキャラクター「桐子」

第55回桐和祭
〈開催概要〉
開催日　2023年
10月21日(土)・22日(日)
開催時間　10:00~17:00
開催場所　目白大学
目白大学短期大学部
新宿キャンパス

論文作成をするChatGPT

「こんにちは！私はChatGPTと呼ばれるAIチャットボットです。自然言語処理と機械学習の技術を使用して、さまざまなトピックについての会話ができます。学習や教育、エンターテイメント、一般的な情報など、幅広いトピックに関する質問にお答えすることができます。」

右記の文章はChatGPTによって生成されたものである。（タイトルも含めて）ChatGPTは世界中でさまざまな目的に活用され、第4次AIブームを引き起こしたとされる。ChatGPTは人々の質問に応答することで、多岐にわたるタスクをこなすAIチャットボットである。ChatGPTは、質問への回答、文章や作文の校正においても優れた能力を発揮する。特に注目される機能の一つは、ChatGPTによる論文作成である。ChatGPTは論文の一部を代筆するだけでなく、完全な論文の作成も可能である。実際、ChatGPTの名前が共著者として論文に掲載されているケースもある。

ChatGPTによる論文規制

しかし、最近ではChatGPTを使用した論文作成に制限が設けられる大学が増えている。例えば、上智大学では原則としてChatGPTを論文に使用することが禁止されており、また東京大学ではAIのみを使用した論文が禁止されている。

ChatGPTの使用に関しては現在も活発な議論が行われている。許容範囲をどこまで設定すべきかは難しい問題であるが、ここで強調したいのは、ChatGPTの限界である。例えば、ChatGPTによる論文では引用元が明示されていないため、その信頼性や真実性を確認することができない。信頼性の高い論文を作成するためには、別途論文や書籍からの引用が必要となる。また、無料版のChatGPTは2021年9月までの情報を学習しているため、提供する情報が古い可能性もある。そのため、完全にChatGPTだけで作成された論文は信頼性に欠ける可能性が高い。信頼性のある論文を作成するためには、人間の手を加える必要があると考えられる。

ただし、ChatGPTの一部を活用することは、論文の執筆をサポートする一助となるであろう。ChatGPTは膨大な論文を学習しており、論文のプロトタイプ作成に適している。論文の構成や校正に客観的な点を持っているChatGPTは、論理的な主張を生成する能力にも長けている。

つまり、ChatGPTは多岐にわたるトピックに対応し、論文作成や校正等に活用されるAIチャットボットである。ただし、完全にChatGPTのみで生成された論文は信頼性に欠ける可能性があるため、注意が必要だ。なぜなら、引用の欠如や情報の古さが制約となる可能性が高いからだ。一方で、部分的な活用においては、論文のプロトタイプ作成や論理的な主張の構築に有効である。ただし、人間の手によって、校正や引用を組み合わせることで信頼性を高める必要がある。ChatGPTの使用に関しては議論が続いており、限界を認識し、人間の手を加えることが重要である。

※本文の作成にはChatGPTを使用している。

（編集部3年　石塚千晶）

AI Chat Generator の画面

Student Column

成人年齢が18歳に　中途半端な基準

若者の成人年齢が下がったことは知っているだろうか。20歳を迎えた若者は身近に感じやすいことだろう。その中でも話題なのが成人式だ。成人年齢が18歳なので、18歳の人は成人式を行うことになる。他にも引き下げられたことで、保護者の同意がなくても携帯電話の契約などが可能になる。

私は若者の自己の決定権を尊重する姿勢や、18歳での自立することへの後押しとしてこの法令に賛成である。しかし、引き下げられても今まで通り変わらないこともある。それはお酒とタバコは20歳からという法律である。私は現に20歳を迎えているからあまり関わることはないのだが、これについて疑問に思っている。単刀直入に言うと、私は専門家ではないが、18歳も20歳も身体の変化なんてないと感じる。また、別にそんなにお酒を飲みたいのか。タバコを吸いたいのかと問われるとそんなことはないが、こうした新しい制度や法律を始める度に中途半端な課題が出て来てしまうこの国に少し残念なところがあるのではないかと私は考えた。

そこでお酒とタバコも18歳まで引き下げてはどうだろうか。18歳はほとんどの人が高校生という立場であるため、高校の校則として規制するというのが良いのではないかと感じる。私が思うに、国が取り締まることではないと感じるのだ。校則として禁止することで、国の取り締まりを削減できる。

この意見を友人に話すと、「ただでさえ学校の先生の労働時間が問題になっている中でさらに仕事を増やすのか」と言われた。私はコラムでこの内容を取り上げるために友人などに意見を聞いた。しかし、聞いた自分が悪かった。日本人は何か新鮮なことを発言する度に批判で制圧してしまう傾向があると感じる。私は「生活指導部の先生が校則を取り締まることと同じ感じだ」と訴えた。少しは私の意見を理解してくれた。

18歳で社会人になり、先輩や上司との付き合いは大切であることは間違いなく、その場でお酒は重要であると感じるし、成人から働いてお酒を飲まなきゃいけない場も増えてくる。欧米の国々では成人年齢が18歳が多く、合衆国であるアメリカは、州により規制が変わるが、ほとんどの国が成人のルールを一律にしている。こうしたように成人としているのならば、成人年齢の引き下げに伴い全てのルールも一律にするべきだと感じる。

（編集部3年　櫻井雄晟）

カナダ旅行記 ～アフターコロナ いざバンクーバーへ～

約3年間続いていた新型コロナウイルスもやっと落ち着いてきた昨今、注目されていることといえば旅行ではないでしょうか。特に海外に行くのは難しかったですが、アフターコロナにより、私も7月にカナダへ行くことができました。

私は4泊6日でカナダのバンクーバーへ旅行に行きました。初めての英語圏なので緊張していましたが、現地には留学している従姉妹がいて安心して過ごすことができました。バンクーバーは日本とは違い、ほとんどの人がマスクをしていなかったので完全にアフターコロナの状態でした。

バンクーバーは自然豊かな街で、ダウンタウンは高層ビルが立ち並んでいて近くには海や山があります。気候は日本と似ていますが、日差しは強いものの夏でも爽やかな風が吹いていて過ごしやすく感じました。

最初に訪れたのは、ギャスタウンにある世界唯一の蒸気時計。レンガ造りの街並みに合ったレトロな雰囲気で海外らしさを感じました。そのほかにも、バンクーバーのシンボルでもあるカナダプレイスや多くの店舗を展開するロブソン通りなどダウンタウンには観光スポットが多くあるので、一日中楽しく過ごすことができました。

バンクーバー　ダウンタウンの高層ビル

次に、観光客に人気の人口島グランビルアイランド。徒歩やバスで行くこともできますが、おすすめはミニフェリーです。海風を感じながらクルーズ気分を堪能できます。屋内マーケットには野菜や果物などが売られていたりカナダらしいお土産屋もあったり観光客にピッタリのスポットになっていました。

次に、バンクーバーからバスで約2時間の場所にあるウィスラー。冬はスキーリゾートタウンで有名ですが、夏はゴンドラで標高2000mまで登ると自然に囲まれた美しい絶景を眺めることができます。山の麓にあるウィスラービレッジはホテルやショップが連なっていてウィスラーならではのお土産に出会うこともできました。個人的に訪れてほしい場所のひとつです。

最後は、観光客にも地元民にも人気のあるイングリッシュベイ。ビーチでは海に入っている人やベンチでくつろいでいる人などそれぞれの過ごし方で楽しんでいました。私たちはビーチの目の前にあるレストランでサンセットを楽しみながら夕食を食べました。サンセットがとても綺麗で、夏は22時頃まで明るいので夜に行くとちょうど見ることができるのでオススメです。

バンクーバーは留学に行きやすい都市としても有名で、街中でも多くの日本人留学生の姿を目にしました。現在留学している従姉妹はコロナ禍でも1度アメリカに留学を経験していて、今年の2月からカナダに語学留学をしています。従姉妹は今後留学したいと考えている人に対して「留学を少しでもしたい気持ちがあるのなら少し無理をしてでも行ける時に行かないと後悔すると思います！英語が喋れないとしても自分の努力次第で英語は伸びるし、日本にいたら感じることのできない文化の違いや生活を自分で経験できることが一番のポイントだと思います。留学は目標や目的を決めて自分から行動していくことが大切です！」と言っていて、チャレンジしてみる勇気と努力が大切だと感じました。

今回の旅行を通して、日本では見ることのできない景色と経験を得ることができました。言語の壁は高く感じましたが、現地の人がフレンドリーに接してくれたり規格外に大きな料理を食べたり、海外だからこそできる体験を経て世界の広さを改めて実感しました。この旅行で得た貴重な経験を忘れることなく、またカナダに行くことがあればまだ知らない場所に訪れて新しい経験をしてみたいです。

（編集部3年　佐久間萌音）

イングリッシュベイ

目白大学新聞
編集長
櫻井雄晟
アートディレクター
黒木茉愛里
編集部
青田夏希
石塚千晶
太田琴美
近田南歩
佐久間萌音
佐瀬海里
長島朋哉
山本真希